

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370767

研究課題名(和文) 戦前期アジア主義の変容と「日本の記憶」 郷土とアジアの視点から

研究課題名(英文) Transformation of Prewar Asianism: From the Local Viewpoints of Saga and Asian History

研究代表者

山崎 功 (YAMAZAKI, Isao)

佐賀大学・芸術地域デザイン学部・教授

研究者番号：60267458

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：佐賀・アジア主義人脈のふたつの流れ、ときに強い反発を招いた大隈重信の合理主義と江藤新平、島義勇らの狂おしいまでの非合理的な熱情、このふたつの極端の間で揺れ動きつつもアジアへの独特の思いを貫いたのが佐賀・九州出身の明治の青年たちであったことを明らかにした。佐賀・九州出身の副島八十六(大隈の側近・南洋・インド専門家)、田中丸善蔵(南洋貿易にも大きな役割を果たした佐賀出身実業家)、石橋正二郎(久留米・世界的企業ブリヂストン創業者)らの近代南方進出に果たした郷土人脈の役割に着目、彼らの抱いた南方イメージと開拓精神を、地方の視点から検証・再定置した。

研究成果の概要(英文)：This study elucidated the unique character of Meiji-born young pioneers of South Sea Advance who came from Saga-Kyushu Region. They were shaken between two streams of Saga-Asianist Connections; one was an extreme rationalist that caused rebounding at the time of Okuma administration, another was super-irrational passion of loyalty and courage of Eto Shimpei and Shima Yoshitake. The researcher succeeded to clarify how the youths of Meiji Saga-Kyushu native managed to achieve their characterful thought to Asia. The pioneers, namely Soejima Yasoroku (Okuma's close attendant, specialist of Southeast Asian affairs; Tanakamaru Zenzo (prominent businessman who played the large role also in the South Pacific Trade during the WWI); Ishibashi Shojiro (founder of the Bridgestone, Kurume-originated global company) and other figures of South Sea Advance from Saga-Kyushu.

研究分野：国際関係 アジア研究

キーワード：佐賀 九州 郷土 南進論 アジア主義 リベラリスト 国際協調 南洋貿易

## 1. 研究開始当初の背景

近代佐賀の民間レベルにおけるアジア・「南方」関与の歴史は、熊本・長崎郷土史における「からゆきさん」や「移民」研究と異なり、佐賀「郷土史」の空白部分となっていた。幕末維新、賢人史は「まちおこし」の観点から「近代化遺産」登録運動や郷土の誇りの称揚として地方自治体・NPOによる発掘・顕彰が本格化した一方、本課題については注目も少なく、研究も極めて限られたものであった。それまでも『佐賀空襲』(佐賀空襲を記録する会)、『語り継ぐ戦争体験』(佐賀県教職員組合 1983年)など、市民レベルで郷土の戦争についてその実体験を記録しようとする取り組みがすすめられてきたが、アジア史の視点、「被害・加害」を踏まえて包括的に郷土史に位置づけ、日本＝アジア関係の中に再定置する試みは極めて限られたものとなっていた。

一方、学術研究成果を如何に郷土史に反映し、地域社会に発信貢献するかも課題となっていた。佐賀ゆかりの副島種臣らを中心に発足、当時の「対外硬」を唱導した東邦協会が、強硬な「侵略的」性格をも内包していたことも公平に検証する安岡昭男「東邦協会と副島種臣」(『政治経済史学』169号、1980年)等の成果の郷土史への反映が課題となっていた。例えば『大東合邦論』著者であり、「福州組事件」応援に加わった樽井藤吉もまた副島種臣らの知遇を得て『佐賀新聞』主筆を務めていたことも留意すべき佐賀郷土史との接点である。明治期の素朴なアジア主義が日本「帝国主義」制度化の中でその中国・朝鮮「侵略」の陥穽に捉われ、挫折衰退していく過程が安岡や初瀬らにより明らかにされていた。(「アジア主義と樽井藤吉」(『広島平和研究』1号 1977年 など)また松浦正孝らは佐賀に起源を有する「鍋島直大～江藤新平～宇都宮太郎」と連なる佐賀閥アジア主義潮流の存在を指摘、薩摩閥アジア主義人脈との

合流のなかで太平洋戦争・大東亜共栄圏へと連なる「大アジア主義」へと帰結していく状況を明らかにした。

こうした学術成果を踏まえ、本研究代表者は日本＝アジア関係史の視点から佐賀・九州人脈の解明に取り組んでいた。その一端として、佐賀閥・東邦協会人脈に端を發しながら大隈に寄り添い、佐賀閥アジア主義潮流とは一線を画しつつ対英協調を志向した経済的南進論者副島八十六の事蹟・動向についての研究に着手した。

副島八十六は、副島種臣と大隈重信に見出されマレー・ジャワ踏査を経て後期東邦協会で頭角を現し、日印協会を実質的にリードした「南進論者」である。松浦らは日中戦争以降の日印協会の分裂と変容の一端を明らかにしており、本研究代表者はそれらを踏まえ、日印協会理事副島八十六に焦点をあて、太平洋戦争に至る日印協会の動向の一端の解明に着手していた。

## 2. 研究の目的

近代佐賀「郷土史」において忘れられ、敢えて触れられることのなかったアジア、「南方」、「戦争」と郷土の関わりの足跡を国内外現地・史資料調査により再検証、他国史、他地域郷土史とのすり合わせにより相対化、アジア史のなかの「郷土史」として複眼的に再定置する。

さらに国内外はもちろん郷土においても忘れられた団体・人物の郷土史における再発掘・批判的再評価を行い、ボーダーレス・双方向的な日本＝アジア関係史のなかに批判的再編成・再定置することにより、「内向き」と「対外硬」、「国際協調」と「アジア主義」の複数の軸の間で揺れ動く国策・世論に影響を与えたと考えられる人脈や風土の限界と可能性の実証分析を試みる。この過程を通じて、現代日本の「内向き」・「対外硬」的風潮を乗り越え、世界史・アジア史のなかの「開

かれた郷土史」を再構成する。

### 3. 研究の方法

副島種臣が中核となった「東邦協会」の変容・衰退と後継関連団体の成立過程について、実証的に追跡するとともに、副島種臣以降の新世代「南方専門家」・「日印協会」理事である副島八十六、さらに田中丸善蔵、藤山雷太など佐賀財界人脈の多様なアジア関与の実態を、史資料調査をもとに実証的に明らかにする。

さらに当時の多様なアジア・南洋関連団体をめぐるアジア主義的思想・運動、アジア関与の事例について、国内外における史資料・現地調査により、明治・大正期日本のアジア関与、南進の実態を解明する。

加えて明治・大正期アジア主義の変容と南進論の実態を再検討、南洋各地における当時の日本のアジア関与の実態を、現地調査により可能な限り解明、明治・大正期日本の南洋・アジア関与がアジア側にどのように認識され、日本側がどのようなアジア認識を持っていたのかを双方向的に実証考察する。

### 4. 研究成果

佐賀・アジア主義人脈のふたつの流れ、大隈重信の「軽薄」とも評された合理主義と江藤新平、島義勇らの狂おしいまでの非合理的な熱情、このふたつの間で揺れ動きつつもアジアへの独特の思いを貫いた佐賀・九州出身の明治の青年たちの見た南方イメージと開拓精神に着目、郷土の視点から明治生まれの佐賀・郷土ゆかりの南進開拓者の思想と行動を明らかにした。

本研究の特色ある成果としては、佐賀九州アジア主義人脈が、南・東南アジアを射程に入れた平和的経済南進を唱道した副島八十六のような南進論者や田中丸善蔵、さらに石橋正二郎といった、南洋に活路を見出した明治リベラリストの気骨あふれる先駆的企業

人らをも輩出している事実の解明があげられる。つまりこれまで知られることのなかった「東邦協会」・佐賀・九州人脈の多様な伏流の中に、良質なアジア提携と欧米との協調による平和的経済交流を併せ持った「アジア主義」を創出しうる可能性を、以下の佐賀九州人脈から析出される諸人物の事績を通じて明らかにした点である。

副島八十六について

第一は、佐賀出身の南洋専門家・副島八十六である。副島八十六といっても、今日佐賀においてその名を知る人はほとんどいなかった。しかし近年、久保田文次、土屋直子、山崎功らにより副島八十六研究が進められ、特に国立国会図書館に寄贈された「副島八十六関係文書」整理公開（2016年11月）が成ったことで、今後その生涯のさらなる解明と再評価に大きな期待が寄せられている。かつて矢野暢は、「自ら南洋に赴き探検その他に従事して、いわば南方関与の先駆者ないし殉教者というイメージをまとい、後の時代に日本が国策として「南進」政策をとり始めたとき、政治的シンボルとして祭り上げられる人びと」のひとりとして副島八十六の名を挙げている。副島は上京克己苦学、大隈の支援を得て南洋探検家としての地位を固め、大隈を支える憲政会院外団として活動、大隈の掲げる日英協調と日本の平和的経済南進を日印協会理事としてあくまで忠実に具現化しようとした人物であった。関連調査（佐賀・有田ゆかりの原口竹次郎について）を通じ、蘭印人脈の交差にのなかで副島八十六と原口竹次郎、松岡静雄らとの邂逅交流について新たな知見考究を深めつつある。

田中丸善蔵について

第二は、佐賀県牛津町出身の玉屋デパート創業二代田中丸善蔵の、ミクロネシア、マーシャル諸島など当時「南洋群島」と呼ばれた島々とのかわりである。特に第一次大戦下危険を冒した日邦丸による南洋視察、ヤルー

トでの田中丸商店社員の活動ぶりは、田中丸のこれまで余り知られていなかった一面である。さらには戦前における日本の南洋経済進出を担ってきた南洋貿易株式会社のきわめて短期間ながら驚異的な発展を田中丸善蔵がリードし、途中で夢破れたことは、南洋事業経営、日本と南洋を結ぶ「南洋航路」開拓者としての田中丸善蔵の名を近代日本の南洋関与の歴史の中に鮮明にとどめている。田中丸研究をすすめるなかで、藤山雷太（佐賀出身）ら財界人脈との繋がりにも着目考察を深めつつある。

石橋正二郎について

第三は、福岡県久留米に創業され、その後世界的な企業として知られるようになるブリヂストンの石橋正二郎とアジア・南方との関わりである。旧藩時代の家内手工業的な足袋づくりが企画化・均一価格化、給料制の導入など経営近代化によって久留米のみならず日本を代表する産業の礎になったことはブリヂストンの歴史を振り返るなかで重要な点である。さらに第一次世界大戦は、当時の「帝国主義」の時代要請であった「人口、資本、面積」の狭小な日本の生存戦略を顕在化させた。中国大陸における満州・華北権益をもとにした「北守南進」、さらには南洋群島獲得で盛り上がった「南進」の動きを石橋がどのようにとらえたか、この解明が本研究の特色ある成果となったと考えている。「護謨八南洋綿布八日本 其他日支双方ヨリ」求めた石橋の青島戦略は、日本の北進・南進ふたつの対外政策を見事に産業に結びつけ、平和的経済進出を目指すものであった。さらに石橋が、ブリヂストンの企業戦略としてときには政府や軍部と妥協・協調しながらも、決してそのいいなりのままになることなく長期的な視野に立ち、揺るぎない信念を以て経営に努めていたことを、とりわけ太平洋戦争下ジャワとの関わり的一端に見出すことができる。

このように、佐賀・アジア主義人脈のふたつの流れ、合理主義と非合理的な熱情、この両極端の間で揺れ動きつつもアジアへの独特の思いを貫いたのが佐賀・九州出身の明治の青年たちであった。研究代表者は、いずれも佐賀・九州出身の副島八十六（大隈の側近・南洋・インド専門家）、田中丸善蔵（南洋貿易にも大きな役割を果たした佐賀出身実業家）、石橋正二郎（久留米・世界的企業ブリヂストン創業者）らの近代南方進出に果たした郷土人脈の役割に着目、彼らの抱いた南方イメージと開拓精神を、地方の視点からアジアとの関係性のなかに検証・再定置した。

今後の成果発展の可能性について

佐賀・九州郷土史とアジア史の連繫、佐賀アジア主義研究をすすめるなかで、本研究代表者は、2017年7月より発足した勤務先女性・若手研究グループ助言支援（雑誌論文（1）参照）を通じて、本研究とも連繫する島原郷土・文化研究の端緒を得た。佐賀と島原との関わりでは、樽井藤吉と明治社会主義、アジア主義をめぐる田中惣五郎、初瀬龍平、飯田鼎、中島武志らの多くの論考があることはいうまでもない。現在、天草・島原一揆と鍋島氏、明治初期における樽井藤吉の東洋社会党結党と島原・佐賀の関わりなどの九州の特色ある事件人物を、世界遺産、明治維新150年など現代的な視点から再考する可能性に着目、研究を継続している。

また、村田省蔵、藤山一郎、水野成夫らアジア主義財界人脈と政治との関わりに着目した松浦正孝の先行研究（「財界人たちの政治とアジア主義」『立教法学』第95巻2017年）などを踏まえて、本研究代表者は南方開拓と佐賀・久留米人脈に焦点を当て、佐賀新聞への取材協力（2018年3月）を契機として藤山雷太、一郎親子についても郷土史の視点から新たな考究をすすめている。さらにそれらを石橋正二郎、九州医専とジャワとの関わ

りにつなげて引き続き研究を進めている。副島八十六と松岡静雄、原口竹次郎の交流についても注目している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

(1). 山崎 功、東加代子、Ta Thi Huyen、清川千穂、田中佑実「雲仙・島原史の多文化研究-交易と信仰から地域振興の時代へ」『佐賀大学芸術地域デザイン学部研究論文集』査読無 第1号 2018年3月 69-84頁

(2). 山崎 功 単著 「久留米・青島・満州・ジャワ 戦前期久留米ゴム工業発展にみる国策アジア進出への協調と抵抗」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』 査読無 第10号 2016年 21-34頁

〔学会発表〕(計4件)

(1). コーディネーター 山崎 功 「佐賀・九州から見た近代日本の南方関与」 佐賀大学芸術地域デザイン学部学術講演会 2017年1月21日 佐賀県有田町九州陶磁文化館講堂

(2). YAMAZAKI Isao, “Kurume - Jakarta - Palembang: Adventurous Wartime Explorations of Bridgestone and Kurume Medical School”, International Research Group “ Social History of Indonesia during the Japanese Occupation ” 2016年10月4日 東京 政策研究大学院大学

(3). YAMAZAKI Isao, “ How Bridgestone survived the War: A Focus on Wartime Business Operations in Java ”, International Research Group “ Social History of Indonesia during the Japanese Occupation ” 2015年12月06日 東京 国際文化会館

(4). YAMAZAKI Isao, “ Nugroho Notosusanto and Japan ”, panel 1: Intellectual Engagements throughout the

Cold War Years, International Symposium Indonesian Relations with the World, Jakarta, LIPI (招待講演) 2015年9月18日 ジャカルタ インドネシア科学院

〔図書〕(計2件)

(1). 山崎 功 単著 『佐賀・九州の南方開拓者たち』海鳥社 2017年 101頁

(2). 山崎 功 単著分担 「九州・東南アジアにおける郷土文化とナショナリズム 東南アジア研究の視点から」佐賀大学・地域学創出プロジェクト編 『佐賀学 II』 2014年 岩田書院 189-205頁

〔産業財産権〕

該当なし

出願状況 該当なし

取得状況 該当なし

〔その他〕(計4件)

(1). 山崎 功 「佐賀・九州の南方開拓者たち 副島八十六・田中丸善蔵・石橋正二郎」『佐賀学ブックレット』紹介講座(佐賀大学公開講座) 2017年11月11日 佐賀市 佐賀大学

(2). 山崎 功 「原口竹次郎氏と有田町の関わり～近現代のアジア歴史の中で人物史～」有田町生涯学習講座(佐賀大学有田町連携講座) 2017年10月26日(招待講演)

(3). 山崎 功 単著分担 「日本とアジア『交易の時代』」佐賀大学美術館 『芸術と経済』 2015年 17-8頁

(4). 山崎 功 「南洋貿易株式会社時代の田中丸善蔵氏」佐賀大学歴史文化研究センター 小城市立歴史資料館 小城市教育委員会 共催 「小城市下と牛津宿」記念講演会(招待講演) 2014年11月22日 小城市 牛津会館

ホームページ等

なし

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

山崎 功 (YAMAZAKI Isao)

佐賀大学・芸術地域デザイン学部・教授  
研究者番号: 60267458